




7月30日、東京の王子ホールで、ドイツの女流ヴァイオリニスト、イザベル・ファウストの演奏で、バッハ無伴奏全6曲のコンサートを聴いた。昨年はアサヒホールで彼女の演奏する3曲を聴き、大変感動し、感服もしたので、楽しみにしていた。2月には予告がなされていたのに、うっかり買い忘れていたがある方の特別な御好意で通し券を買うことが出来たのは、大きな幸いであった。その日のうちに全6曲を弾くというのは私も、20年程前に、一度、大阪で行ったが、彼女は第1部を15時開演とし、ソナタ第1番、パルティータ第1番、とソナタ第2番を弾き、18時開演の第2部では、パルティータ第3番、ソナタ第3番、そして最後にパルティータ第2番を弾いた。

冒頭のアダージョでは第3小節目の、通常Eフラットで弾かれる低音を、デモンストラティブにEナチュラルで長めに強調して奏されたのが印象的だった。彼女の演奏スタイルは、モダンな楽器を使用しながら徹底的にバロック風で、昨年はAを435位の調弦だったので、明らかに低いと感じられたが、今年は440位であった。演奏は全体に、低音を大切にし、和音は必ず下から上へとブレイクし、アーティキュレーションは鮮明にし、そのためには音と音の間が切れてしまうことも厭わない。速い楽章は常に速めで実に見事であること。繰り返しは全て行い、2度目は必ず装飾を入れ、絶対に2度と同じことを弾かぬこと等、バロック精神に則した奏法とその態度は素晴らしい。というのも、バロック時代には「退屈」ということが最も罪悪とされ、忌み嫌われたのだ。音程は完璧で、音色もミスも殆ど無い、このような、その方法には非の打ち所の無い彼女の素晴らしい演奏に聴衆は満足し、我々同業者はこれを手本とし、真似し、成る可く近づこうとする。最後のシャコンヌでは、テーマは複付点リズム  に近く弾かれたが、中間の長調部分では、
昨年とは異なり、今年はそうではなかった。今年は  の様に極く当たり前に弾かれたが、昨年彼女は  の様に弾いたので私は大きな衝

撃を受けたが、納得し最近では「我が意を得たり」とさえ思うようになっている。シャコンヌの最終音を少し長めだが、無理なく小さなディミヌエンドで彼女は弾き終え、弓先を弦の上空数センチの所でキープしていたので、聴衆の中の誰一人として、少なくとも 10 秒以上から 15 秒位の比較的長い時間、彼女の弓が下ろされるまで拍手をする者は居なかった。余韻が強く印象に残り、彼女自身も東京の聴衆に満足した様だった。第 2 部曲目の CD が発売され、終演後サイン会が行われたので、私は長い列の後方に並び、シャコンヌ中間部の複付点リズムについて尋ねたところ、彼女は「もうその弾き方はしない。というのもシャコンヌは舞曲というよりは、マエストロソの性格がより強いから」と答えてくれたが、私自身は昨年の衝撃を受けて、今後しばらく、(きっと当分の間)複付点リズムで演奏するつもりで居る。尚、この演奏会は第 1 部、第 2 部、共に完売で、本当に音楽を心の底からお好きな方達が集った、との印象を受けた。音楽家、弦楽器奏者のお仲間をあまり見かけなかったことを、付記して置きたい。

私は、自分にとってこの感動的な、心に残る、演奏上の示唆に富んだコンサートの批評を、8 月末、朝日新聞夕刊で長木誠司氏が書いて居られるのを見付けた。やっと約 1 ヶ月後に発表された批評である。ニューヨークタイムズ紙では必ず翌日に、ドイツなどでも少なくとも数日のうちに(1 週間とは空かない)大新聞で批評が出るのに日本では何と遅いことか！そもそも批評が載ることだけでも幸とし、良しとすべきかもしれないが、欧米に比べ、このタイムラグはやはり、文化的後進性としか捉えられぬだろう。氏の批評の内容にはほぼ(100%ではない)賛成だが、長木氏の(ファウストの演奏が余りにも素晴らしかったので)バッハの無伴奏は当分(他のアーティストの演奏では)聴きたくない！という気持ちも私は個人的には解らぬでは無いが、長木氏が一個人、私人としてその感慨を持たれることをリスペクトしたとしても、批評家というのは公人である、と私は考える。公人にもそういうことを呟く権利はあるかもしれないが、実際にはこのファウストの演奏が長木氏にとって新たな

基準となったのなら尚更のこと、彼女以外の演奏もイヤでも積極的に聴き歩き、氏の新基準をモノサシとして、他の演奏を(必要とあらば)コッピドク批評し、批判して欲しい。それが公人としての批評家の役割ではないだろうか？長木氏に故意に無視されてしまう数々の(あるいは無数の)バッハ無伴奏演奏の中にも氏が受容なされ得る度合いのスケールがあるはずだ。評論家長木氏には御自分の基準で他のアーティストを糾弾なさる権利があるのだ。その権利を最大限に行使していただきたい。さもなくば彼女以外のアーティストは、堪ったものではない。何故ならその人達は無視されるのだから。長木氏をはじめ評論家の先生方には、御自分達のオピニオンリーダーとしての自覚をもっと鮮明に持っていただきたい。さもないと我々演奏家は、根無し草の如く、自覚を持たないままに、正統的なものから離れてしまう危険性を多分に持っているのだ。我々演奏家達は皆、真面目に御自分達の仕事の役割を弁えていらっしゃる批評家の方々から真剣に叱っていただきたいのだ。叱られるのがイヤなら演奏家としての資格など無いのだ、と私は考える。